

ABS=NOM 型および ABS=DEF 型能格言語の導出

田 中 裕 幸*

要 旨

θ 役割が付与される領域と構造格を司る機能範疇 (T, v) の領域が完全に分離されており、その結果、 v の格が与えられ得る位置に外項が基底生成されるとする仮説を採用することにより、抽象格付与の方法を厳密に構造格に限定しつつ、対格言語および能格言語の格パターンを生成する自然な統語的基盤が得られることを示す。対格言語と能格言語、また能格言語の中でも Legate (2008) の意味での ABS=NOM 型言語と ABS=DEF 型言語を区別するパラメータとして、機能範疇の素性が誘発する操作の順序、および格付与子と被格付与子双方の多重性が重要な役割を果たす。

キーワード：能格性 (ergativity)、対格性 (accusativity)、動詞句構造 (v P structure)、素性の順序付け (feature ordering)、素性の多重性 (multiplicity of features)

I 序

標準的に仮定されている他動詞文の基底構造 (1) においては、外項は v P 指定部に基底生成される (Hale and Keyser 1993; Chomsky 1995)。従って、派生のどの段階においても v が外項を c 統御することはなく、構造格は格付与子が c 統御する名詞句に対してのみ付与されるという仮定の下では、 v が外項に格を付与する余地はない¹⁾。

* 本稿は2022年1月に Linguistic Society of America にて発表した内容 (Tanaka 2022) の一部を抽出し、改訂したものである。

- (1) [TP T{EPP, Case} [_vP EA *v*{Case} [VP ... IA ...]]]
 (EA: 外項 (external argument); IA: 内項 (internal argument))

これに対し本稿では、(2) の仮説を採用し、その結果 (3) が (1) に代わる他動詞文の基底構造であると主張する。

- (2) a. T も *v* も全ての項の基底生成位置を c 統御する。
 b. T も *v* も EPP 素性を持つ。
 (3) [TP T{EPP, Case} [_vP *v*{EPP, Case} [VP EA > IA]]]
 ($\alpha > \beta$: α が β を非対称的に c 統御する)

(3) は、*v* が外項の基底生成位置を非対称的に c 統御しているという点、および *v* が EPP 素性を持つという点において (1) と異なる。

この仮説の背後には、 θ 役割が付与される領域は「A 的な」機能 (A 移動、格、一致等) が具現化される領域とは重なるべきでないという指針がある。

(1) では *v* が θ 役割を付与する語彙範疇であり、かつ格を付与する機能範疇であるという二重の性質を持っているが、上記の仮説により、*v* を潜在的に T と同じ形式素性を持つ純粋に機能的な範疇として扱うことが可能になる²⁾。

- 1) 但し、*v* がその指定部に対して構造格 (Ura 2000) ないし内格 (Woolford 1997; Legate 2008) を (言語によっては) 与え得ると仮定する場合はこの限りではない。
 2) (1) では外的 θ 役割を付与する範疇 (つまり *v*) が格も付与するため、Burzio の一般化 (Burzio 1986) を簡単に捉えることができるが、(3) ではこの二つの機能が一つの範疇にまとまっていないため、Burzio の一般化をどう捉えるかはそれほど簡単な問題ではないかもしれない。しかし、理論的には *v* が格素性を持つことと *v* が外項を生成する範疇 (例えば VoiceP (Kratzer 1996)) を選択することに関連付けることで解決することができる。(本稿では VoiceP と VP の表記上の区別はしない。)

もう一点ここで記しておきたいことは、本稿で *v* と呼んでいる範疇が実はアスペクトを司る主要部 (Asp(ect)⁹⁾) と同一であるという分析が考えられるということである。仮にそうであるならば、節の最下層に述語と項の関係が表される「 θ 領域」があり、その上位に T(ense) と Asp という事象類を扱う領域 (形式的には「A 的」統語事象を司る機能範疇が集まる領域) が存在することになる。後述するように能格性が

以下では、このような節構造に関する見方が能格性の基本的特性に自然な説明を与えることを論じる。能格言語においては、他動詞の主語（能格性の文献における慣例に従い、Aと呼ぶ）が他動詞の目的語（O）および自動詞の主語（S）とは異なる格で標示される。Aが持つ格を能格（ergative）、O・Sが持つ格を絶対格（absolute）と呼ぶ³⁾。

(4) ジルバル語（Dixon 1994: 10）

- a. numa-∅ yabu-ngu bura-n
father-ABS mother-ERG see-NONFUT
'Mother saw father.'
- b. numa-∅ banaga-n'u
father-ABS return-NONFUT
'Father returned.'

II節では本稿の分析に必要なパラメータを導入する。III節において、まず格を持たない自動詞の *v* が現れた場合にどのような派生が起こるかを見た後、IV節とV節において *v* が格を持つ他動詞文の派生を見る。IV節では *v* が {EPP → Case} の順序付けを持つ時に対格パターンが得られることを示す。V節では、*v* が逆に {Case → EPP} の順序付けを持つ時に能格パターンが得られることを示す。また、他のパラメータ設定の違いにより、Legate (2008) の意味での ABS=NOM 型 (V-1 節) および ABS=DEF 型 (V-2 節) の能格言語が導出できることを示し、V-3 節では動作格型言語の導出について論じる。VI 節では結論と今後の課題を述べる。

v の形式素性に関するパラメータ設定の帰結であり、かつ、*v* が Asp と同一のものであるとすれば、それはある種の分裂能格性 (split ergativity) がアスペクトによって条件付けられるという事実と符合する。

3) 本稿で用いる省略は以下の通りである。ABS: absolutive; ACC: accusative; AOR: aorist; ERG: ergative; NOM: nominative; NONFUT: non-future; PERF: perfective. 表記の統一性を保つために一部のグロスを改変してある。また、「三立型」、「動作格型」などの格組織に関する用語の日本語訳については角田 (2009) を参照している。

II パラメータ

ここでパラメータ (5) と (6) を導入する。これらは、他動詞文が能格的な格配列を持つか、対格的な格配列を持つかを直接決定付けるものである。

- (5) 機能範疇の素性の多重性：機能範疇の各形式素性は単一の NP のみに関連付けられ得るか、または複数の NP に関連付けられ得る。
- (6) 素性間の順序：ある主要部が形式素性 F_1 と F_2 を持つ場合、 F_1 がその操作を誘発してから F_2 がその操作を誘発するか、 F_2 がその操作を誘発してから F_1 がその操作を誘発するかのどちらかである。

(5) によれば、形式素性はそれを持つ主要部の c 統御領域内を、トップダウンで適合する素性を求めて探査するという前提の下、任意の言語における任意の範疇の素性 F は、それが c 統御する要素の中で最も近いものとのみ関係付けられるか、更に探査を続けてより遠い要素とも関係付けられるかのどちらかである。前者のような素性 F を F_S (S: single) と表記し、 F は [-multiple] であるということにする。また、後者のような素性 F を F_M と表記し、 F は [+multiple] であるということにする。例えば EPP_S は最も近い名詞句を指定部に牽引するが、 EPP_M は任意の数の名詞句を牽引し、多重指定部を形成することができる (Richards 1999)。 $Case_S$ は最も近い、格を受け取ることができる名詞句にのみ格を付与することができるが、 $Case_M$ は複数の名詞句に格を付与することができる (Hiraiwa 2005)⁴⁾。

(6) は、ある単一の主要部が複数の素性を持つ場合、それらが操作を誘発する順序を定めるパラメータである。本稿では EPP 素性と格素性に議論を限定するが、(6) によれば、 EPP 素性と格素性の両方を持つ $T \cdot v$ は、 EPP 素性による誘引を行ってから格を付与する ($\{EPP \rightarrow Case\}$) か、格を付与

4) 多重性が議論に関係のないところでは S/M の表記は省略する。

してから EPP 素性による誘引を行うか（{Case → EPP}）のどちらかに定まっていることになる。

また、格配列の能格性を決定づけるものではないものの、後で見る ABS=NOM 型言語と ABS=DEF 型言語の違いに関わるものとして、(7) を導入する。

- (7) 名詞句の格の多重性：名詞句は、単一の抽象格のみを付与され得るか、複数の抽象格を付与され得るかのどちらかである。

(5) が探査する側である機能範疇を持つ形式素性の多重性について述べているのに対して、それと同様の変異が格を受け取る側である名詞句にもあるとするのが (7) である。各言語の名詞句は、統語計算の中で複数の抽象格 (abstract Case) を与えられることを容認するか、容認しないかのどちらかであるという仮定である。複数の抽象格が与えられた場合は、その言語の形態規則により、単一の形態格 (morphological case) として具現化することもあれば、多重の形態格として具現化する (case stacking) こともあると考える。

III 自動詞文

この枠組みにおいて他動詞文の能格パターンがどう派生されるかを見る前に、他動詞の *v* のパラメータ設定に関わらずどの言語においても (ほぼ) 同様の派生を辿る自動詞文について考える。自動詞の *v* は格素性を持たないと仮定する (但し V-3 節で見る動作格型言語を除く)。従って、*v* が EPP 素性だけを持つ (8a) のような *v*P 構造を出発点として派生が進む。

- (8) a. [_vP *v*{EPP} [VP ... S ...]]
 b. [_vP **S_i** *v*{**EPP**} [VP ... *t_i* ...]]
 c. [TP T{**Case** → EPP} [_vP **S_i.NOM/ABS** *v*{EPP} [VP ... *t_i* ...]]]
 d. [TP **S_i.NOM/ABS** T{**Case** → **EPP**} [_vP *t'_i* *v*{EPP} [VP ... *t_i* ...]]]

まず、*v* の EPP 素性が S を指定部に牽引する (8b)。次に導入される T が {Case → EPP} の順序を持つとすると⁵⁾、T はまず S に格を付与し (8c)、次に EPP 素性により S を TP 指定部に牽引する (8d)。この結果、(4b) や (9) のように自動詞主語 S が T の格を受け取る文が派生され、T の格は主格または絶対格として形態的に具現化する。

(9) 英語

She(NOM) ran.

IV 対格性：*v* {EPP → Case}

前節の自動詞文の派生を踏まえ、本節からは他動詞文を考察する。他動詞文では *v* は格素性を持っており、格素性と EPP 素性の間の順序づけが重要な違いをもたらす。

まず、(10a) のように *v* が {EPP_s → Case} の順序に設定されている場合にどのような派生が生じるのかを考える。

- (10) a. [_{VP} *v* {EPP_s → Case} [_{VP} A > O]]
 b. [_{VP} A_i *v* {EPP_s → Case} [_{VP} *t*_i > O]]
 c. [_{VP} A_i *v* {EPP_s → **Case**} [_{VP} *t*_i > O.ACC]]
 d. [_{TP} T {**Case** → EPP} [_{VP} A_i.NOM *v* {EPP_s → **Case**}
 [_{VP} *t*_i > O.ACC]]]
 e. [_{TP} A_i.NOM T {**Case** → **EPP**} [_{VP} *t*'_i *v* {EPP_s → **Case**}
 [_{VP} *t*_i > O.ACC]]]

最初に *v* の EPP 素性が A を牽引する (10b)。A 移動の痕跡は統語操作に

5) この枠組みでは定形 (finite) の T はこの順序を持つ必要がある。逆の順序 ({EPP → Case}) であれば、主語を TP 指定部に牽引した後に T が格を付与することになるが、その時点で主語は T の c 統御領域に存在せず、格付与がなされないことになる。

対して不可視であるという前提の下 (Chomsky 1995)、*v* は VP 指定部の A の痕跡を無視し、O に格を付与する (10c)。その後 T が A に格を付与し (10d)、T の EPP 素性が A を TP 指定部に牽引する (10e)。結果として (11) のように A が T の格を、O が *v* の格を付与される文が生成される。前節で見たとおり、自動詞主語 (S) が T の格を付与されることを考え合わせると、他動詞の *v* がこの設定を持つ言語においては A と S が同じ T の格を付与される、対格型の格パターンを持つことが分かる。

(11) 英語

We(NOM) saw them(ACC).

ここで重要な点は、*v* が格を付与しようとする時点 (10c) では A が必ず *v* の c 統御領域の外に移動しているため、A が *v* によって格を付与される可能性はないということである。

また、*v* の EPP 素性が [-multiple] (EPP_s) と指定されていることにも注意されたい。仮にこれが [+multiple] であるとする、A と O の両方が格を付与されないうま *v*P 指定部に引き上げられる可能性がある⁶⁾。これが行われた場合、*v* の格素性が格付与を誘発しないまま派生が終了することを許容しないか、T が A と O に多重に格を付与する能力を持たないならば、派生は破綻する。逆に、*v* の格素性が格付与を誘発しないまま派生が終了することを許容し、かつ T が A と O の両方に格を付与する能力を持つ場合、派生は収束すると予測される⁷⁾。

V 能格性：*v*{Case → EPP}

1. ABS=NOM 型言語

次に *v* が格付与を先に行うように設定され、Case_s および EPP_M という多

6) その場合は多重指定部を作ることになる。

7) これが主格目的語構文の派生である可能性もある。

重性の設定がなされていると仮定してみよう (12a)。また、パラメータ (7) に関しては名詞句が単一の格しか受け取れないように設定されていると仮定する。この場合、*v* は A に格を付与し (12b)、その後 A と O が *v*P 指定部に引き上げられる (12c)。次に T の格素性が格を受け取ることのできる名詞句を探索する。A は O より T に近いが、A は既に *v* から格付与されており、かつ単一の格しか受け取ることができないため、T は A の次に近い O に格を付与すると考える (12d)。最後に A が T の EPP 素性により TP 指定部に引き上げられる (12e)⁸⁾。

- (12) a. [_vP *v* {Case_s → EPP_M} [VP A > O]]
 b. [_vP *v* {**Case**_s → EPP_M} [VP A.ERG > O]]
 c. [_vP A_i.ERG O_j *v* {Case_s → **EPP**_M} [VP *t*_i > *t*_j]]
 d. [TP T {**Case** → EPP} [_vP A_i.ERG O_j.ABS *v* {Case_s → EPP_M}
 [VP *t*_i > *t*_j]]]
 e. [TP A_i.ERG T {**Case** → **EPP**} [_vP *t*'_i O_j.ABS *v* {Case_s → EPP_M}
 [VP *t*_i > *t*_j]]]

III 節で見たように、自動詞主語 S が T から格を付与されることから⁹⁾、この設定を持つ言語では S と O が T から、A が *v* から、格を付与されることが分かる。もしこの抽象格の付与の結果が形態的に透明な形で具現化すれば、S と O が同じ形態格 (絶対格)、A が別の形態格 (能格) で標示されることが予測される。このような派生を持つ言語の候補としてジョージア語が挙げられる。

8) T が VP 内部の要素にアクセスすることを禁止するフェーズ不可侵条件 (Chomsky 2000) を仮定するならば、T が O に格付与するためには *v* の EPP 素性は [+multiple] である必要がある。仮に *v* の EPP 素性が [-multiple] であったとすると、O は VP の内部に留まり、T から格付与することはできない。

9) 動作格型言語の能格主語を除く (V-3 節参照)。

- (13) ジョージア語 (Comrie 1987: 351-352)
- a. Student-i mivida.
Student-ABS went
'The student went.'
- b. Student-ma ceril-i dacera.
Student-ERG letter-ABS wrote
'The student wrote the letter.'

Legate (2008) は形態的能格性を持つ言語は “absolute as nominative” (ABS=NOM) 型言語と “absolute as default” (ABS=DEF) 型言語の二つに分類されると述べている。ジョージア語は ABS=NOM 型言語の一つであるが、Legate の分析によれば、ABS=NOM 型言語においては S と O が同じ抽象格 (つまり T の格) を受け取り、A は別の抽象格を受け取る¹⁰⁾。(12) (と (8)) においては、S と O が T から、A が別の格付与子 (つまり *v*) から格を付与されることから、本節のパラメータ設定を持つ言語は ABS=NOM 言語に相当すると言える。但し、A に対する格付与の方法は、*v* が c 統御領域内の名詞句に与える構造格であるという点で、*v* が *v*P 指定部に与える内在格であるとする Legate の分析とは異なる。

A への格付与の方法は異なるが、本稿の理論は Legate (2008) と同様に、ABS=NOM 言語では非定形節において絶対格が具現化し得ないことを予測する。この予測は、非定形の T が格付与能力を持たないことと、このタイプの言語においては定形節において T が S と O に格を付与することから導くことができる (Legate 2008: 66)。

次節ではパラメータ (5)、(7) の設定を変化させることで、もう一方のタイプの能格言語、つまり ABS=DEF 型の言語を導出することができること

10) Legate (2008) は Woolford (1997) に従い、この抽象格を *v* が与える内在格であると仮定している。内在格を用いた能格性の分析については今西 (2020: 第 6 章) に詳しい。

を示す。

2. 三立型・ABS=DEF 型言語

(12) においては v の格素性は [-multiple] であり、パラメータ (7) に関しては単一の名詞句に複数の格が付与されることを許容しない設定であったが、本節ではこの二つのパラメータ設定を反転させた結果を考察する。つまり、 v の格素性が [+multiple] であり、かつ単一の名詞句に複数の格が付与されることを許容するという設定において他動詞文がどのような派生を辿るかを考える。この場合、 v は A と O に格を与え (14b)、両者を引き上げる (14c)。T は格を受け取ることができる最も近い名詞句を探すが、今回はそれに該当するのは A である。A は既に v から格を付与されているが、一つの名詞句が複数の格を受け取ることが許されているため、A が選ばれるのである。従って A は T の格をも受け取ることになる (14d)。最後に T が最も近い名詞句である A を引き上げて派生は収束する (14e)¹¹⁾。

- (14) a. [v P v {Case_M → EPP_M} [VP A > O]]
 b. [v P v {**Case**_M → EPP_M} [VP A.ACC > O.ACC]]
 c. [v P A_i.ACC O_j.ACC v {**Case**_M → **EPP**_M} [VP t_i > t_j]]
 d. [TP T{**Case** → EPP} [v P A_i.ACC.NOM O_j.ACC v {**Case**_M → EPP_M} [VP t_i > t_j]]]
 e. [TP A_i.ACC.NOM T{**Case** → **EPP**} [v P t'_i O_j.ACC v {**Case**_M → EPP_M} [VP t_i > t_j]]]

従ってこの派生では A が T と v から二つの格を付与され、O が v から格を付与される。S は T から格を付与されるので (III 節)、このパラメータ設

11) ここでは例示のために、(12) と同様、 v の EPP 素性は [+multiple] であると仮定しているが、[-multiple] と仮定することも可能である。その場合、O は (14b) のように v によって格を付与された後、派生終了までその位置に留まることになる。

定からは A、O、S が抽象格の観点においてそれぞれ異なる言語が生み出されることになる。仮にこの言語の形態規則がこの統語的状况を透明に表現するならば、つまり、主格 (T の与える抽象格)、対格 (*v* の与える抽象格)、および二重に付与された抽象格 (ACC.NOM) を三つの異なる形態格に写像するならば、ネズ・パース語 (Baker 2015: 22) のように A、O、S がそれぞれ異なる格で標示される「三立型 (tripartite)」の言語を得る¹²⁾。

Legate (2008) によれば、前節で見た ABS=NOM 型言語とは異なり、ABS=DEF 型言語は統語的に見れば三立型であるが¹³⁾、しかし T の抽象格も *v* の抽象格も、「絶対格」と呼ばれるデフォルトの形態格に写像され、A のみが内在格を具現化した別の形態格(「能格」)に写像される。統語的には三者とも異なる抽象格が与えられているが、形態格としては O と S が同じ格を持つため、表面上、能格パターンを持つように見える。このタイプの言語の例としてワルピリ語、ヒンディー語、エンガ語、ニウエ語が挙げられる。本稿の分析 (14) においては、一つの名詞句に二重に付与された抽象格 (ACC.NOM) が所謂能格に、一つの名詞句に一つだけ付与された抽象格 (NOM または ACC) が絶対格に、それぞれ写像されると仮定すれば、ABS=NOM 型言語が得られることになる。

従って、本稿の分析に従えば、ABS=NOM 型言語の O と異なり、ABS=DEF 型言語の O は非定形節において絶対格で標示され得るが、S は絶対格で標示され得ないという予測が成り立つ。これは、S については、非定形の T は格を与えないので他の格を付与されない限り格が与えられないが、O については、このタイプの言語においては T の定形・非定形の別と関係なく *v* が格を与えるということから導き出される。(上述の言語の関連する例につ

12) Deal (2010) は三立型言語の分析において、A が *v* と T の双方から二重の一致を受け、その結果が形態的能格に写像されるという分析を提案している。本稿と異なり、A は *v*P 指定部に基底生成され、格の具現化に関する素性は ϕ 素性であると仮定しているが、A が T・*v* と二重の統語的關係を結んだ結果が能格である点で本稿の分析は Deal の分析と類似していると言える。

13) Baker (2015: 22) を参照。

いては Legate (2008: 62-65) を参照されたい。

更に、ABS=NOM 型言語と異なり、ABS=DEF 型言語では二重目的語構文の二つの目的語が絶対格で標示される (Legate 2008: section 2.4)。この観察は、ABS=DEF 型言語の *v* の格素性が必ず [+multiple] であり、従って二つの目的語への格付与が可能であると予測する本稿の分析とも整合性がある¹⁴⁾。

3. 動作格型言語

いわゆる動作格型 (active-inactive) 言語¹⁵⁾ においては、非能格自動詞の主語は能格で、非対格自動詞の主語は絶対格で標示される。動作格型言語には、ABS=NOM 型言語 (ジョージア語等) もあれば、ABS=DEF 型言語 (ヒンディー語等) もある。

(15) ジョージア語 (Harris 1982: 293)

- a. Rezo- \emptyset gamoizarda
 Rezo-ABS grow.up.AOR
 ‘Rezo grew up.’
- b. Bavšv-ma iṭira
 child-ERG cried.AOR
 ‘The child cried.’

(16) ヒンディー語 (Mahajan 1996: 46)

- a. Raam- \emptyset gir gəyaa
 Ram-ABS fall.PERF

14) 一方で、ABS=NOM 型言語の二重目的語の絶対格が一つの名詞句に限られるという事実は、Legate の分析においても本稿の分析においても、T の格素性の唯一性、つまり T の格素性が [-multiple] であることに帰せられるべきであり、*v* の格素性の唯一性に帰せられるべきではない。本稿では T の格素性の唯一性・多重性を *v* の性質とは独立したものであると考えるため、この事実を直ちに説明することはできない。

15) Split-S 型とも呼ばれる (Dixon 1994)。

‘Ram fell down.’

- b. Kuttō-ne bhōkaa.
 dogs-ERG bark.PERF
 ‘Dogs barked.’

本稿の枠組みでは、このような自動詞主語の格標示の「分裂」は以下のよう
 に分析することができる。必要な前提は、このタイプの言語においては非
 能格動詞の *v* は格付与能力を持ち、非対格動詞の *v* は格付与能力を持たない
 ということである (Burzio 1986)。非対格動詞の主語 ((15a)、(16a)) につ
 いては、*v* が格付与能力を持たないため、派生は (8) の通りに進む。非能
 格動詞の主語については、*v* が外項の基底生成位置を *c* 統御するという仮定
 (2a) の下、*v* の格が外項に付与されることが予測される。(17) は非能格動
 詞の場合の *vP* レベルまでの派生を示している。

- (17) a. [_{VP} *v* {**Case** → EPP} [_{VP} ... S.ERG/ACC ...]]
 b. [_{VP} S.ERG/ACC *v* {**Case** → EPP} [_{VP} ... *t_i* ...]]

この後の派生は ABS=NOM 型言語と ABS=DEF 型言語で異なる。ABS
 =NOM 型言語 (15b) においては、名詞句が一つの抽象格しか受け取れな
 いという設定であるが、T の格 (イタリック体で表記) が名詞句に付与され
 ないことを許容するという仮定の下 (Ura 2000: 222-223)、(18) のように
 進めば派生は収束する。

- (18) ABS=NOM 型言語
 a. [_{TP} T {*Case* → EPP} [_{VP} S.ERG *v* {**Case** → EPP} [_{VP} ... *t_i* ...]]]
 b. [_{TP} S.ERG T {*Case* → EPP} [_{VP} *t_i'* *v* {**Case** → EPP} [_{VP} ... *t_i* ...]]]

一方で ABS=DEF 型言語における (16b) のような能格自動詞文の派生は、

(17)の後、(19)のように続く。ここでSは(14)にある他動詞文のAと全く同じ派生を辿ることに留意されたい。特に、V-2節で見たようにABS=DEF型言語においては名詞句が複数の格を受け取ることができるため、Sは*v*の格に加えてTの格も受け取ることができ(19a)、二重に付与された抽象格が形態的能格に写像される。

(19) ABS=DEF型言語

- a. [TP T{Case → EPP} [_vP S_i.ACC.NOM *v*{Case → EPP}
[VP ... *t_i* ...]]]
- b. [TP S_i.ACC.NOM T{Case → EPP} [_vP *t_i'* *v*{Case → EPP}
[VP ... *t_i* ...]]]

VI 結語

本稿では、 θ 役割が与えられる領域とA的統語論に関わる領域(T、*v*)が分離しており、従って*v*が外項の基底生成位置を非対称的にc統御するという仮説を採用することで、抽象格付与の方法を厳密に構造格に限定しつつ、対格パターンおよび能格パターンを生成する自然な統語的基盤が得られることを示した。

この枠組みに能格的な一致(ergative agreement)がどのように統合されるべきかは今後の課題である。明らかに、 ϕ 素性は格素性、EPP素性と共に素性の順序に組み込まれるであろうが、これら三つの素性のTにおける順列と*v*における順列の組み合わせのうち、どれが実際に確認できるパターンを生成し(その中には格は能格パターン、一致は対格パターンを示す言語も含まれる)、どれが存在しないパターンを生成してしまうのかを精査し、後者については、なぜその組み合わせが阻止されるのかという問題に取り組む必要がある。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

参考文献

- Baker, Mark. 2015. *Case: Its principles and its parameters*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, Noam. 1995. Categories and transformations. In *The minimalist program*, 219-394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Comrie, Bernard. 1987. Ergativity. In *Syntactic typology*, ed. Winfred P. Lehmann, 131-174. Austin: University of Texas Press.
- Deal, Amy Rose. 2010. Ergative case and the transitive subject: A view from Nez Perce. *Natural Language and Linguistic Theory* 28: 73-120. URL <https://doi.org/10.1007/s11049-009-9081-5>.
- Dixon, Robert M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hale, Kenneth, and Samuel J. Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Harris, Alice C. 1982. Georgian and the unaccusative hypothesis. *Language* 58: 290-306. URL <https://doi.org/10.2307/414100>.
- Hiraiwa, Ken. 2005. Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture. Doctoral dissertation, MIT.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, ed. Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109-137. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Legate, Julie A. 2008. Morphological and abstract case. *Linguistic Inquiry* 39: 55-101. URL <https://doi.org/10.1162/ling.2008.39.1.55>.
- Mahajan, Anoop K. 1996. Universal Grammar and the typology of ergative languages. In *Studies on Universal Grammar and typological variation*, ed. Artemis Alexiadou and T. Alan Hall, 35-57. Philadelphia: John Benjamins.
- Richards, Norvin. 1999. Featural cyclicity and the ordering of multiple specifiers. In *Working minimalism*, 127-158. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Tanaka, Hiroyuki. 2022. Ergativity as a natural manifestation of the $v > EA$ base. In *Proceedings of the Linguistic Society of America*. URL <https://doi.org/10.3765/plsa.v7i1.5254>.
- Ura, Hiroyuki. 2000. *Checking theory and grammatical functions in Universal Grammar*. New York: Oxford University Press.
- Woolford, Ellen. 1997. Four-way Case systems: Ergative, nominative, objective, and accusative.

tive. *Natural Language and Linguistic Theory* 15: 181-227. URL <https://www.jstor.org/stable/4047864>.

今西祐介 (2020) 『言語の能格性』東京：ひつじ書房.

角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 (改訂版)』東京：くろしお出版.